

廣池千九郎と道経一体コース

下 田 健 人

廣池千九郎生誕150年を記念して、麗澤大学経済学部は、道経一体コースをスタートした。麗澤大学の教育理念は知徳一体であり、1992年に開設した経済学部（当時は国際経済学部）の教育理念もここから離れることはない。経済学における「知」とは「経済」であり、「経営」である。その意味で、道経一体は、経済学部における全ての学び、全ての教育の横串としての意味をもってきた。

日本における人口減少、若者減少の社会経済的背景が、大学教育における戦略の再考を求める。多くの私立大学が定員確保に四苦八苦し、UI (University Identity) を模索している状況において、麗澤大学教育において最も有利な点は、確固たる教育理念をもつことである。いかに社会環境が変化しようとも、ぶれない確からしさがある。それが知徳一体であり、道経一体である。

1. 廣池千九郎と道徳科学経済学原論

公益財団法人モラロジー研究所のウェブサイトによれば、廣池千九郎は、その晩年である昭和10年、モラロジー経済学の構想についてレコードの吹き込みを行った。吹き込まれた内容は、彼の死後、昭和14年、『道徳科学経済学原論』（以下、原論と略す）として研究所から出版された。道徳科学の研究に生涯を費やした博士にとって、道徳と経済の関係はもっとも大きな課題の一つと考えられた。

彼の批判は、経済学の主流である近代経済学に対する根源的な批判である。近代経済学における経済主体は、ホモ・エコノミクス（経済人）である。ホモ・エコノミクスとは、自らの効用（満足）を最大にするために合理的な行動をとる人間である。経済活動には家計と企業という2人の主人公がいて、2人は市場という場で出会う。消費の場である家計でも、生産の場である企業でも、主体はホモ・エコノミクスである。家計の最終目標は効用の最大化であり、企業の最終目標は利益の最大化である。市場において2人の主人公が利己心に基づいて自由に営むことで、「神の見えざる手」が社会全体に利益を導く。経済学の父アダム・スミスによって提唱された理論は、現代まで継承される。

果たして、廣池千九郎が説いた経済の主体は、ホモ・エコノミクスではない。彼は、原論の中で、次のようにアダム・スミスを批判する（現代の表現に直している）。

「アダム・スミスは、経済並びに経済学の原理を人間の欲望（wants）におく。人間の本能（instinct）は、時に肉体を指し、時に精神を指す。人間の本能には、道徳的本能と自己保存の本能があり、自己保存の本能が進んで利己的本能になる。スミスは、道徳的本能の存在を無視し、経済及び経済学の原理を利己的本能の出現と考えた。すなわち、人間の本能の一部のみをみて決定した学説である。」（『道徳科学経済学原論』4頁）。

スミスの経済学を批判した上で、廣池千九郎は、道徳的本能に支えられて合理的に行動する人間を主体とした経済学の樹立を提唱する。すなわち、ホモ・エコノミクスではなく、ホモ・モラロジーを主体とした経済学の体系である。残念ながら、原論の中で十分に論理的に展開されているわけではない。しかし、道徳科学経済学を研究、教育するための機関が「日本千葉県東葛飾郡金町の林間にある」と言及している（原論18頁）。

2. 徳づくりの経営

経済の主体としてのホモ・モラロジーの考えをいち早く敷衍させたのは経営及び経営学の領域である。廣池千九郎が、当時、道徳科学に根ざした経営を多くの経営者に唱えたことと連関する。原論の中でも、例えば、good-willという言葉を用い、経営における道徳性、道徳に基づく持続性を説く。

麗澤大学経済学部が世界に誇る学問研究領域に企業倫理がある。全世界で、企業による不祥事が報道されない日はない。コンプライアンスの遵守が、企業の死活を決定する。

また、モラロジー研究所は、道経一体経営講座を開催し、道徳と経済の一体に根ざした経営の指導、普及を実践する。2013年に同研究所から出版された『徳づくりの経営』は、道経一体経営セミナーのテキストであるが、廣池千九郎の思想を現代の企業経営に反映、展開したものである。

3. 道経一体コース

さて、冒頭に示したように、経済学部では、道経一体コースを開設する。経済学部における教育の横串であった理念を縦串として「見える化」した。経営及び経営学の領域では、道徳と経済の一体は著しい発展をみたかもしれない。しかし、経済及び経済学の領域では、まだ不十分である。廣池千九郎の遺言は果たされていない。

本コースは3年次からの選抜コースであるが、同コースの導入に伴い、また、専攻制の導入もあり、2016年度からカリキュラムを変更した。学部一年生に『現代社会と道徳科学』という必修の授業を課した。同授業の冒頭5回では、廣池千九郎の5つの原理（自我没却、神、義務先行、伝統、人心開発救済）を学ぶ。麗大を代表する道徳科学、道徳経済、企業倫理などの専門家が、1年間道徳科学と経済、経営について教える。2年次には、やはり必修科目である道徳科学を学ぶ。3年次のコア科目として、公益財団法人モラロジー研究所及び一般社団法人日本道経会の寄付講座である『道徳経営特論 A』を置いた。3年次以降、道経一体

コースの履修者は、個々の興味に基づき、経済学理論、経済政策、道経一体経営、ファミリー・ビジネス、事業承継などを学ぶ。

確かに、社会経済環境の変化に伴い、変わるべき、変えるべきことはあるだろう。廣池千九郎の生きた時代に比べて、人々の豊かさ、消費生活、産業構造、経済発展の仕組み、国際社会との連関など、社会経済を取り巻く環境は大きく変化した。しかし、時代が変化しようが、ぶれない理念がある。道徳である。ホモ・モラロジーを前提とした経済学理論の構築は未達成である。麗澤で生きる者は、その与えられた役割から離れてはいけぬ。

私には、現代の大学教育が、怒濤のように押し寄せるポピュリズムに打ちのめされた感が否めない。果たして戦後日本の高等教育は制度疲労を起こしているのではないか。新しい環境変化のもとで、世界が必要としている人を供給できていないのではないか。社会が求めている最も重要なコンピテンシーである道徳を教えなければならない。古今東西変わらぬ原理である。